

集会報告記録集

沖縄-全国

オンライン

第29回

全国教育研究交流集会

2020年11月28・29日

子育てと教育に
「命どう宝」を
根づかせる

一人権と平和の教育をとらえ直そう

民主教育研究所

目 次

■ 主催者より

沖縄県民間教育研究所 所長 長堂登志子 1

民主教育研究所 代表運営委員 梅原利夫 2

■ 研究集会概要報告 中村雅子 3

■ 講 演 「親の背景、子どもの背景——沖縄の女性調査より」 上間陽子 10

■ シンポジウム 「沖縄から日本の教育をとらえ直す」 10

■ 分科会

第1 子ども・青年の育ちと主権者教育 12

第2 学力向上策と道徳教育の教育課程 14

第3 子育てと学校づくり・教職員の働き方 16

第4 性とジェンダー平等の教育 18

第5 平和教育の創造 20

第6 基地・環境問題と教育 22

第7 自治体づくりと教育・住民運動 25

主催者より

第29回全国教育交流集会（オンライン）を終えて

沖縄県民間教育研究所所長 長堂登志子

オンラインであっても無事終了したことに、関係してくださった皆さんに心からお礼を言います。当初沖縄大学でやることに決定した時は、夜の宴会部長を喜屋武さんに決めて、おいしいお酒は何を出すか、沖縄からの出し物は何にするかなど論議していました。全体会の幕開けも成井さんと前田さんが精力的に取り組んで仕上げた映画「ずいせん学徒の沖縄戦」の縮小版を作って観てもらおうなどと話していました。すべてコロナに流されて残念ですが力を合わせて一つのことをやり遂げたことは大きな収穫です。

沖民研・沖民教の取り組み

7つの分科会の世話人は沖縄県民間教育研究団体(沖民教)の各サークルが、関係する分科会を引き受けてくれたので安心して取り組みました。思い返せば、10年前研究所を上里勲先輩に説得されて引き受けた時は、各サークルが先細りしており、沖民教の運営委員会も開かれていませんでした。年1回開催していた「沖民研・沖民教合同研究集会」も消えてしまいそうな状況でした。毎月の運営委員会を成立させるために、現場の教師を集めることは並大抵ではありません。沖民研の所長で沖民教の事務局長という立場になった私はやはり最初は孤独な闘いでした。現場の忙しさが分かるだけに強く要求できない面もありましたが、定例化し続け、合同研究集会も毎年開催し、所報の『共育者』を年1回発行し、会員を増やしと流れができてきました。集会の会場も沖縄大学の梶村さん、沖縄国際大学の三村さん、安原さんと有力な大学教員が会員にいたので、会場費も安くてできました。

2016年の12月に「地域民主教育全国交流研究会」の全国集会を沖縄でやりたいと依頼された時も大変な決意で引き受けました。各サークルの大きな結束でやり遂げ、大成功だったと自負してい

ます(共育者14号に収録)。その経験も今回に活かされたと思います。

オンラインでの開催

昨年8月24日に最終的な協議をズーム会議で行い、オンラインの開催が決定しました。その後9月6日(日)「2020年度沖民研・沖民教合同研究集会」を行い、タイトルを「なぜ、全国学力テストに反対するのかー危機、全国学力テストが子どもを押しつぶす」にし、講師は鈴木大裕さんに出場してもらい、ズーム会議で行いました。全国集会の前哨戦だと下地さんを先頭に取り組みました。梅原さんも参加していただき、45名の参加で、鈴木さんに質問が集中し、意見もしっかりと出し、こんなに手ごたえのある集会は今までにやることがないと興奮しました。去年から「おきなわ子どもを守る会」をお母さんたちと結成しており、研究所の運営にも力になってくれている事務局の赤嶺さんと島袋さんが今回の第7分科会を担ってくれました。教師だけでなく取り組みも全国集会の大きな成果です。

今回上間さんの講演と「沖縄から教育をとらえ直す」シンポジウムと7つの分科会でしたが、沖縄がまだまだ戦後処理が行き届いていない面と、沖縄の教育界が国の教育の支配下にどっぷりと浸っている実態が浮き彫りになったかと思います。「子どものまなざし」「子どもの声を聴く」教育が沖縄から発信できるように、今後も民研の活動を広げていかなくはなりません。また沖縄の貧しさを温存し、県民の分断を図ることで、辺野古新基地建設や自衛隊の基地建設が進められていることに、座り込みに参加しながら腹立たしく思っています。国が沖縄県民の声を聞かない、県民の民意を無視する沖縄差別は沖縄だけの問題ではありません。基地問題を教育の場で教えることが中立に反するという圧力も政府の都合のいい沖縄蔑視です。このおかしな圧力

に負けている沖縄の県教委や学校関係者にも、真実をしっかりと子どもたちと共有できる教育現場にするよう、声をあげていかななくてはなりません。今後とも私たちの国が子どもたちにしっかりと民主主義と

は何かを伝え、実践していく力をつけていくための教育(共育)ができるように力を合わせていきたいと思えます。

民主教育研究所 代表運営委員 梅原利夫

開会あいさつ

私が長堂さんに合同集会を呼びかけたのは、2年10か月前のことです。集会のメインテーマのキーワードである「命どう宝」は、私が沖縄から学んだ、現代に人間が生きる思想なのだと思っております。

講演者である上間陽子さんの新刊著『海をあげる』の最終部分に、次のような一文があります。研究者の不用意な言葉に対する筆者の糾弾の言葉です。「沖縄の怒りに癒され、自分の生活圏を見返すことなく言葉を発すること自体が、日本と沖縄の関係を表している(pp.234~5)。」ここを私は次のように読み取りました。

現在、沖縄が抱えている困難の直接の要因は、75年前の沖縄戦で大日本帝国の「捨て石」にされたこと、戦後27年間本土は、独立を奪われたままの沖縄に多大な犠牲を強いてきたこと、1972年復帰後も、核も基地も無くならずさらなる犠牲と抑圧を本土が押し付けていることにあります。しかもそれは、遠くは薩摩藩の琉球支配以来、あたかも本土が沖縄を植民地のように扱ってきた差別構造にあるのです。引用した言葉には、筆者の抑えた憤りが込められている、と私は共感し反省を伴って読みました。

沖縄で10万人規模の抗議集会が開かれましたが、首都東京で未だ100万人規模の集会さえ開けていない本土の現実をこそ、私たちは真摯に捉えるべきなのです。

私は発売中の『人間と教育』誌に、「私(たち)がとらえる沖縄への視座」という論文を書きました。沖縄学の祖と言われる伊波普猷と、同時代の民俗学者である柳田国男および経済学者の河上肇との交流があり、学問の上でも深いつながりがありました。

そのことに想いを馳せながら、教育の現在と今後を考える3つの切り口を提案しました。

1. 沖縄における「子どもの貧困」という現実。

その 貧困率は全国平均の2倍以上。

2. チビチリガマ破壊事件に衝撃 2017.9。

未だ有効な平和教育の手が届いていない層がいるという現実を直視すべきこと。

3. 辺野古新基地建設に関する県民投票 2019.2。

それに若者世代が提唱と運動の推進者になり、新しい動きを創り出してきている動向。

よくよく考えてみますと、この3つは本土を含む日本社会全体の課題であると思えます。

今回、このような形態の集会にならざるを得ませんでした。いつの日か自由に行き来できるようになった時、泡盛を酌み交わしながらさらに親しく交流したいと願っています。

閉会あいさつ

沖縄と全国の民研が主軸となった、初めての合同集会がこのように成功裏に終わって、快い疲れのなか嬉しさがこみ上げてきています。それは、長い準備過程で培われた互いの課題意識を底流にして、子育て教育の現実を共有しながら有意義な意見交換と交流ができたからでした。しかも、私たちはたくさんの宿題をいただきました。もっと話し合いたい要求が残りました。今後、それぞれの研究の必要性から全国と沖縄とを行き来することでしょう。その時を見すえて、また今日から学習と実践と研究の歩みを進めてまいります。

本日まで培われた研究的な友情を貴重な財産として、今後とも大切にしていきたいと願っています。参加して下さった沖縄と全国のみなさんに熱くお礼申し上げます。

研究集会概要報告

中村雅子(民主教育研究所副代表運営委員・桜美林大学)

<全体会>

11月28日(土) 13:00~16:00

第29回全国教育研究交流集会は、沖縄県民間教育研究所(沖民研)、沖縄県民間教育団体連絡会(沖民教)と民主教育研究所(民研)の共催で、沖縄で開催すべく準備を進めてきた。合同集会の開催が両方で合意・決定されたのは2019年3月から6月にかけてだったが、新型コロナウイルス感染症の拡大という、当初予期されなかった状況のもとで、オンラインでの開催を2020年8月に決定した。開催にあたっては、おきなわ住民自治研究所とおきなわ子どもを守る会の後援をいただいた。

初日の午後の全体会は、東京ではエデュカス東京の民研事務局、沖縄では那覇教育会館に主催者側スタッフが集合し、オンラインでつなげての共同運営を行い、全国からは184名がオンラインで参加した。司会は沖縄から里井洋一、東京から中村雅子が担当した。

以下は上間陽子さんの講演と、続いてのシンポジウムにおける安藤聡彦さん、下地治人さん、中村清二さん(報告順)の報告のタイトルである。

講演

親の背景、子どもの背景

——沖縄の女性調査より

上間陽子(琉球大学)

シンポジウム

沖縄から日本の教育をとらえ直す

司会: 里井洋一(琉球大学)

中村雅子(桜美林大学)

<不可視なもの>への想像力について

——環境、社会、そして私

安藤聡彦(埼玉大学)

「社会」とのつながりを求めている子

——義務教育と「少年革命家ゆたぼん」

下地治人(沖縄県公立小学校)

休校経験の意味と学力

——混乱の中から芽吹く民主主義

中村清二(大東文化大学)

(シンポジウム閉会後に参加者が思いを自由に交流する「ユンタク」の時間も設けられた。)

初めてのオンライン開催で、参加者にはチャットで質問やコメントを書き込んでもらう方法を試みた。その書き込みに講演・報告者が答え、さらにそれに対してチャットでの書き込みと実際の発言が続くという形で、活発な意見交流がされた。

ここではその全体を網羅的にまとめることはせず、いくつかのテーマに絞って、どういうことが議論されたのかを記録としてとどめておくこととしたい。趣旨を損なわない範囲で、表現や文体の統一、補足的加筆等の編集を加えており、発言者の名前も講演・報告者以外は示していない。

シンポジウム報告者のレジュメは参加者に事前に送られているが、その内容をまとめた論考が『人間と教育』第109号(3月10日発行予定)に掲載されるので、是非、それをお読みいただきたい。また、上間さんの講演は未発表調査資料をもとにお話しいただいたものであるため、その内容については上間さんの今後の執筆発表を待つということでご了承いただきたい。

上間陽子さんの講演は沖縄の若い女性を対象としたふたつの社会調査(①沖縄風俗業界で働く若者の調査18名:2012年~2017年/②若年出産女性調査75名:2020年10月)で明らかになった彼女たちの生育環境の厳しさと、その存在が見えない沖縄社会の分断を問題にしたもので、不登校の低年齢化、「リアルな」ピアグループ形成のむつかしさ、風俗業界の厳しさ、子どもを育てて生きる現場の厳しさの重層化、暴力と全般的なケアの不在(快の不在)等が語られた。厳しさの重層化については、ピアグループを横軸に、実母との関係を縦軸とした分析が示された。のちの議論では特に学校・医療・福祉などの制度による「支援」のありかたがひとつの焦点となった。それらの機関があてにされておらず、多様なアディクションによって彼女たちがひとりで逃れようとしていること、そのため困難が見えづらく、また、むしろ、これらの制度自体が彼女たちにとっての困難を生み出しているという問題である。

安藤聡彦さんの報告は、原発に地域の経済が依存し、小学校16校と中学校7校が全部統合された青森県下北と、「暮らしの根っこに自然の価値への確信」があり、「子どもたちが自分の言葉と夢を持っている」沖縄県西表島というふたつの地域を取り上げたものである。安藤さんは、上間さんが講演で、彼女たちの困難が教師には見えにくく型にはまった見方で彼女たちを排除してしまっている場合もあるのではないかと述べたことを受けて、下北の子どもの「なんであんなに面倒なものをつくったのか」という原発についての疑問や不安を教師たちがスルーしていることを指摘し、その背景として、1)大きな学校となって忙しく、子どもたちの声を十分受け止めてもらえない、2)村をあげての原発推進体制の中であって、その在り方を問うような問題を取り上げられない、3)忙しすぎてそもそも一人の市民として原発問題に向き合えない、という三点を挙げて、それらを「問いの喪失」という問題として提起した。

下地治人さんの報告は、大阪出身で沖縄在住の小学生ユーチューバー「ゆたぼん」の学校批判

と、下地学級の子どもたちの「学校をよくするための意見」を手がかりに、大人の子どもへのまなざしを問うたものである。文化的なもの(「学校的なもの」)によって「子どもの自然」「人間の自然」を見るまなざしが遮られているのではないかと、下地さんは「子ども」(自然)から「教育」(文化)を見直すことを提起している。

中村清二さんは、パンデミックによる休校後に授業時数の確保が最優先され、行事などが削減・中止された問題から、「教科教育」と「教科外教育」の区別と位置づけについて、城丸章夫の「学校教育の構造」論を手がかりに論じ、学力形成にとっての「教科外教育」の重要性を提起した。

以下では、まず、講演とシンポジウムの報告についてのチャットの書き込みを紹介し、それに対する講演者・報告者の応答と、お互いへのコメントを記す。さらにそれを受けての書き込みや発言については、テーマ別の整理を試みた。

<講演・報告についての書き込みと応答>

上間さんの講演について

- ・彼女たちの「ことがらへの意味付け」に理解と共感を持った上で、それが現実社会では多くの困難や畏や無理解に出会って、思い通りには生きていけないなか、生き抜いている姿が伝わってきたのは、上間さんの「再意味付け」が的確であるということかなと思った。
- ・リアルな沖縄の現状を知ることが出来た。
- ・上間さんの「調査の取り組みとその語り」は、ひどい困難を抱えた人たちに接近するだけでも難しいところ、その人たちから信頼されて、相談役や支援者にもなりながら、しかし彼女らの直面する社会的現実を、彼女たちの経験・経歴・現在を取り巻くものとして、当事者以上に深く捉え意味づけている点に感銘を受けた。
- ・子どもの声が伝わってくる感じがした。もっと話を深く聞きたかった。

・子ども個々の声を聴くことをメインにしたアプローチが喫緊のこと。

「教師と学校の定型像と無理解」

上間さんが教師の問題として「民主教育を作る側が子どもの様子、目の前の子どもの困難さをわかっているのか」と問い、「子どもの困難さをキャッチするセンスのある人はそこから実践を作っていける」と述べたことについて、多くの意見が出された。

・学校・教師の側の「ことがらへの意味付け」の世界の内側に入ってみると、それはまた困難な教育情勢のなかを「教育専門職を生きる」その人たちのそれなりの姿にも、ある共感を感じる面も生まれた。

上間: ヴェール一枚向こう側の世界が見えづらいのはなぜかということ、教師たちの働く文脈に即して考える必要もある。

貧困と学力

・文部科学省、教育委員会のすすめる学力向上によって貧困は解決に向かっていくのか。

上間: 一定層にはエンパワーメントになるかもしれないが、学テ対策は貧困対策にならない。

安藤さんの報告について

教師の市民性

・教師が市民として問題に向き合えない、大事な指摘。

・安藤さんの市民としてのリアルはよくわかった。

安藤: 上間さんの提起した教師の「センス」を考えると市民性が大きいのではないか。子どもたちの語っている言葉の中にあることを読み取って社会につなげていくためには教師が学校に縛られているところから身を引きはがさなければならないのではないか。

答えが決まっていて、問うことが必要ない、許されないという状況。

下北は40年前くらいまでは西表と近い、地域と学校の関係があったが、それが開発と学校の統合で失われた。それを元に戻すことは難しい。

下地さんの報告について

・子どもを主権者、自身の生を生きる当事者としてとらえることが必要だと再認識した。

・学校文化に取り込まれている。まさに…わたしたちの周りにも(大人にも)空気を読む文化に取り込まれていると感じている。子どもの声を聴く、みんなの声を聴く雰囲気を作っていきたい。

・「あいさつ」が「学校をもっとよくするための意見」25のうちの14(過半数)あることは、確かに「学校文化」の浸透を感じさせる。「子どもの自然から学校・教育を捉えなおす」は、戸塚簾をはじめとする、日本の教師たちの教育実践の主要観点であったように思う。「学校文化」や「学校の眼差し」は一枚岩とは言えないかも、とも感じた。下地さん自身も一枚岩でないように感じた。「支配的な学校文化」「支配的な学校の眼差し」という表現のほうがいいのかなど思ったりした。

・ぶっちゃけ、いま教師に求められることは何か。ある素敵な価値はいいかもしれない。でも、ある価値よりも、いまを生きる個人がどう生きているのかに出会えるのかということが[脇に]置いておけない大人の課題ではないか。

[上間さんから下地さんへ]

・ゆたぼんは沖縄の特権層では?

・「学校をよくするための意見」で子どもたちが「あいさつをなんとかしたい」と言っているのを「子どもの自然」ととらえるのか?

・中村報告とつなげるなら、「コロナの時どうしてた?」という話をするのが大事ではないのか。

下地: 上間さんのゆたぼんについての発言で、確かにそうだなと気づかされた。でも、彼はお客さんかもしれないが、彼も「子どもの自然」の中で生きている。浜田寿美夫は学校文化は変えられると言っている。学校文化をどう変えるか。学校の文化は必要。子どもの自然からとらえ直す。

「ぶっちゃけ何が必要か」に答えるのは難しい。子どもたちをちゃんと見切れるように見直していきたい。

・「子どもの自然」は昔から子どもをとらえる教育の根源に関わる概念だと思う。今こそ、「子どもの自然」が発揮される「子ども発の学び」が必要ではないか。子どもは教科書の

枠にとらわれずに、その世界を一層広げる対象、枠を超えた問いや疑問を持つ。そこを大事にした教育づくりが、下地さんの子どもの自然、生活のまなざしではないか。

中村さんの報告について

城丸さんと中村さんの「2区分」では「生活綴り方」はどこに位置づくことになるのか、また、教科指導と教科外指導の中村さんの把握がなぜ最後に「民主主義の学校」という課題になるのか、という質問がされた。

中村：生活綴り方を教育課程に位置付けると、国家権力と対抗できない。学力に縛られる教育実践は何かを考えていた。学力という言葉に吟味し、学力にとっての教科外の意味を考えてみたかった。

・城丸・中村区分で、たとえば「休校明けで教科の時間数確保で行事を減らすより、教科外の行事などに正当な位置づけを」という点は理解した。それは報告の2区分を使わない人たちも言っているかもしれない。たとえば「学校・教育の民主主義」の点で、これだけの良い捉えと実践がある、ありうるという具体例を挙げてもらえると、自分も理解が深まるように思った。

・教科外と教科という分離ではなく、子どもたちの姿を受け止める器として教科外教育と認識すると、教科教育が子どもの自然に合わないものになると思う。子どもの自然に合うように教科教育をつくりださなくてはいけないと思う。

・教科外教育の意味に希望を持てる話だった。
・教室の日常の中で生きる子どもと教師の可能性についても具体的に話してほしかった。

・「学力」についての「学力テスト」的捉え方の縛りを打破する課題、その重要性という点は共感した。

・学校再開によって感じた教員の思いについては、大変興味がある。そして、学校作りの可能性を感じている。しかし、それらの声を拾いきれていないことに焦燥感がある。

中村：城丸の教科外と教科(ことば)の区別は子どもが社会と向き合う体のことを言っている。子どもたちの間の体の響きあいを学力形成に結び付けることは、上間さんの快の感覚

の有無とつながるのではないか。

・結局、中村さんの学力は何か。

・村山俊太郎：教室文化を育てる。生活綴り方：生活者として子どもたちを育てていく。

これは教科による学力形成と違うと思うが、どう統合されるか。

・教室文化が教科指導とどうかかわるのか。子どもたちが教科をつくる 算数・数学を子どもたちが作っていく。既成の算数・数学を教え込むのではなく、そこが教室文化につながっていく。それが本当の学び。算数・数学も現実の問題をどう解決するかというところから。

[上間さんから中村さんへ]

城丸解釈にかかわって、「体が響き合う」ことを学力ととらえるという点について、目を見開かれた。10代の女の子たちで言葉が出てこない子たちは子ども時代の体験がまるっと抜けている。みんなが遊ぶから友達、という体験がない。教科としても教科外としてもとりくまなければならない。

<テーマ別のまとめ>

sense—まなざし—想像力

安藤さんが「想像力」と言い、上間さんが「センス」と言い、下地さんが「まなざし」と表現したものについて

・そのどれもが重要。文科省の「資質・能力は機械的」。

・上間さんが言われる「センス」という言葉、共感できる。

・エンパシー！

- ・センスと言うと身も蓋もないところがある。
- ・センス、感覚。磨き続ける、考え続けないと失っていく。私のリスペクトする戦争体験者の先輩がおっしゃっていた「教育は絶対に間違えてはいけない」という言葉。教育側にいる私たちは、「絶対に間違わない教育」をするためには、感性(センス)を磨くこと。子どもたちには、幼いときからセンスが尊重されることで、自ずと磨かれていくものかもしれないと感じた。絶対なんてないが、柔軟で純粋な子どもたちに関わる私たちが、絶対に間違わないようにするという意思は必要だと思う。
- ・声を聴く。子どもを信じる。見守る。対等である存在になる。これが課題。
- ・上間さんの問い(支援する側がもっている価値規範が支援にならないものをつくっているという論点)と、安藤さんの問い(原発や基地がある地域では、一枚岩ではないにしてもそこには支配的価値規範があり、外側から見ると見える問題をみえない／みないようにしている)はつながっているように思うが、まだそのつながりが議論ではみえてこない。この点を深めてほしい。
- ・自らの起こしている暴力性にどれほど鋭敏か。子どもの発言は尊重されるべきと言いつつ、権利主体にするためにこちらの権力性を自覚できるか。そこに基づかないと言葉は入っていない。コントロールをしないことが子どもを認めること。
- ・大人の理想のなかで語っている気がした。子どもがいま求めていることに沿った話になっているのか？そこが見えてこない。感じられない。子どもの意見を聞く、センスだったり想像することだったりまなざしだったり、おとなの世界観で子どもたちの声を解釈していないか？子どもの世界に入り込んで子どもの声を聞いてほしいと思った。

教師のあり方

民主教育を作る側が子どもの様子をわかってい

- るのか、目の前の子どもの困難さが見えているのかという上間さんの提起に対して
- ・教師がどうして子どもの自然な声を教科教育の中で聞けないのか。
- ・沖縄の社会の中で、ある子どもたちにとって教師はどういう存在になっているのか。
[自分の地域では]教師は学校社会の勝ち組。勉強でも部活動でも。だからなかなかしんどい子どもたちの気持ちが分からない、子どもたちに寄り添えない。家庭の教育力ということで「自己責任」にしてしまう。教師が大切にしているのはいまだに指導。教えることに精一杯で、学び合うことではないし、支援とか理解や受容でもない。
- ・ゼロトレランス
学校の先生の問題の一因に「校内に正義を貫徹するため」「子どもたちに一般社会のルールを教えるため」という名目で導入されたゼロトレランスがあると思う。中学校や高等学校の先生だけではなく、特別支援学校の教師もルールに厳しく、逸脱する生徒に対して非常に厳しいように思う。教師は子どもたちを見て見ぬふり。これが、教育なのか、本当に疑問だった。一度外れた人が、その集団に戻ることが許されない、そのような社会を、中学校が作っていつているのが、本当に恐ろしい。ゼロトレランスはアメリカでは、心理学会の結論は「ゼロトレランス、ゼロエビデンス(ゼロトレランスに根拠なし)」とされている。今、ゼロトレランスで生徒に対面している学校が、その在り方を見直すこと、人を大切にしたい関わりに変えていく必要性を感じる。
- ・学校に不適応を起こす子どもの約3割は学校の教師とのトラブルだと、不登校になった子どもたちは答えている。学校の先生方がそのことの意味をもっと考えてほしい。
- ・「子どもを守る会」の保護者からの聞き取りで、「子どもに会ったことがないカウンセラーが子どもを発達障害にしたがった」という事例や、先生方の多忙のせいだと思うが、子どもが疑問をもったことに説明する余裕や納得させるだけのものがなく、「ルール」という一言で終わらせてしまうことが

問題なのではないか。ルールでも、考えていくことや話し合うことが大切なのではないか。

- 上間さんの聞き取りをされている子どもたちの話をきくと、学校現場の姿がなかなかみえない。先日、学力調査に参加していない子どもが多いのではないかということを知った。これはなかなか大変で、先生方が子どもそのものを見ようとしなくなっているということ。自分も含めてどんどん鈍感になっているのを感じる。
- 教科教育が子どもの声が聞こえないのは教師も子どももスタンダードで縛られているからだと思う。沖縄でも学力向上はスタンダードが学校に定着したから点数が上がったと自信をもって教育委員会は言っている。
- 上間: 調査した子どもたちは大人に期待していないからあまり先生たちに怒っていない。

行政サイドの人もひっかかっている部分を掘り下げていくと行政批判がどんどん出てくる。教師は制度的に弱い職業。同僚からどう見られているか、「いい子」で育て評価に敏感。子どもの力をみとることが出来る人。教師たちのかたくなさをどうしたらいいのかな〜と思いながら。

学力テスト

- 2018年に1381人、8%が受験していない。特別支援クラスの生徒は抜いてはいけない。「普通クラスに在籍し、通級で国語・算数をやっている」子どもと「不登校」を抜く。
「学習が1年以上遅れている場合」は除いてもよいことになっている。特別支援学級を除いても400人不明。
- 沖縄はやさしいしあたたかいが、障害児に対する見方はまだ改善の余地がある。
- 学テにくわえて県版テストがある。
- 名護の子ども7割〜8割が学校へ行くのが嫌、学テが怖い、と言っている。県版学力テストをやっているところの不登校はどうなっているかのデータが必要。
- 以前は中学校から問題行動を起こしていた子どもたちが低年齢化している理由は何か。

家庭の教育力の弱さもないとは言えないが、問題は別にあると感じた。今、小学校は、学力テストに力を入れ、子どもたちはヒーヒー言いながら、学習に追い立てられている印象。昔ながらの、人は生きていけばいいさ〜的な優しさ、相手に対する思いやりが奪われているような気がする。

家庭の孤立化・子どもの孤立化・共同性の喪失

議論を通じて「孤立化」がひとつのキーワードとして浮かび上がった。これは安藤報告における「共同性の喪失」とつながるものである。

- NPO非行克服支援センターで仕事をしている。「雨あがりの会」という非行の子ども親の自助グループでは、「学校はすぐには分かってくれない」「警察も分かってくれない」ということが話されている。非行は減っており、ひきこもりや不登校の相談が半分以上になっている。

上間報告を聞いて、自分が経験してきた少年事件と密接な関係があると思った。少年事件は減っている。8割近くが共犯だったが、一昨年それが5割を切った。非行少年も孤独。ピアグループを持ってない。学校からも排除されて暴力団や風俗に入ってしまう。国や自治体は子どもの資質・能力をどう伸ばすかしか言っていない。そこに適合できなかった子どもを排除している。学校は資質・能力を高めるべきではあるが、それを支える環境はどうあるべきかについて考えていくべきではないかと思う。

- 自分の学級にも不登校の子どもがいる。家族も孤立化していて支援員が訪ねても出てこない。社会が変わってきている。
- 下北の原発問題。地元の人たちはあまり関係ないという。学校統合で共同性が薄らいできていく。生活を媒介にしてつながっていた地域が分断された。安藤さんは公民館長の役割が大きいと言っていたが、八重山地区では学力向上委員会を組織して、公民館長をトップにやっている。地域の中に共同性と言いつつ、そういう状態になっている。

平和教育

開会挨拶で沖民研の長堂さんから、沖縄戦については学んでも、現在の米軍基地の問題などを学校で教えることはタブーとなっているという発言があった。また、上間さんは「平和教育の創造」ということが啓蒙的なのではないか、平和教育が子どもたちの現実には即していなかったのはなぜかという問いが出された。

・5年前NYのNPT会議に行った。サーロ節子さんが被爆体験を高校生に話す。被爆体験のみでなくその後の自分の生き方を語っている。「どうやってそのつらさを乗り越えてきたのか」と女子高生が泣いて質問していた。平和教育が戦争はいけないとか平和が大切という考え方を教えるのでは[不十分で、体験者からの学びが重要]。

一例として、広島沼田さんは脚を切断。アオギリのそばで被爆70年後に話しはじめた。東京の中学校の修学旅行で「クソババアの話聞いてられるか」という雰囲気もある中、義足をバンと見せて語りだす。

・体験者から聞く。15年前、子どものおじいちゃん

から聞くという実践を行った。事実から子どもたちが学んでいく文化が重要。生活を見れる文化を育てていく。

まとめ担当の一言

チャットを用いてのシンポジウムは全国教育研究交流集会では初めての試みで、PCの画面上で展開される講演・報告や議論と、それらと並行して書き込まれる、ある意味での独立性も持った「チャット言説空間」を統合してのまとめの作成は、予想以上に難しかった。このまとめは、取りこぼした論点や編集の過不足などの問題も自覚しつつ、参加された方々がここにまとめきれていないことも含めて当日の議論を想起することができ、また、参加されなかった方々にもここでの議論や参加者の思いを受け止めていただき、更なる議論が発展することを念じて作成したものである。



講演 親の背景、子どもの背景 —沖縄の女性調査より

上間陽子 (琉球大学)



2011年からの予備調査を含め女性調査、聞き取りから、子どもたちと家族の状況は、

誰かに語っても解決できないと思っており、一人で逃れようとしている。その困難が社会的に見えなくなり、社会や子どもの中にも分断がある。子ども食堂や無料塾というレベルでなく、それ以前の問題であり、全体的なケアの不在と報告されました。

シンポジウム 沖縄から日本の教育をとらえ直す

① <不可視なもの>への想像力について

—環境、社会、そして私 安藤聡彦 (埼玉大学)

② 「社会」とのつながりを求めている子

—義務教育と「少年革命家ゆたぼん」

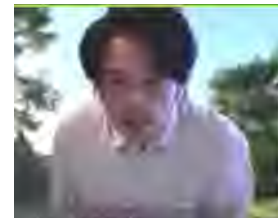
下地治人 (沖縄県公立小学校)

③ 休校経験の意味と学力—混乱の中から芽吹く民主主義

中村清二 (大東文化大学)

◎司会 中村雅子 (民研副代表運営委員)

里井洋一 (琉球大学)



シンポジウムは「沖縄から日本の教育をとらえ直す」をテーマに「<不可視なもの>への想像力について—環境、社会、そして私」と題して安藤聡彦さん(埼玉大学)、「『社会』とのつながりを求めている子—義務教育と『少年革命家ゆたぼん』」と題して下地治人さん(沖縄県公立小学校)、「休校経験の意味と学力—混乱の中から芽吹く民主主義」

と題して中村清二さん(大東文化大学)が報告され、白熱した討論が交わされ、予定の16時に終了後(ゆんたく)も多くの方がオンライン上に残り、議論は18時までつづきました。なおシンポジストの報告は3月10日発行の『人間と教育』109号に掲載されますので、ぜひご購入下さい。

分科会報告

- 第1 子ども・青年の育ちと主権者教育
- 第2 学力向上策と道徳教育の教育課程
- 第3 子育てと学校づくり・教職員の働き方
- 第4 性とジェンダー平等の教育
- 第5 平和教育の創造
- 第6 基地・環境問題と教育
- 第7 自治体づくりと教育・住民運動



第1分科会 子ども・青年の育ちと主権者教育

【レポート】

- ① 問題提起 馬場久志（埼玉大学）
② 「コロナ禍で考える保育の『新』と『真』」 保育者2名（沖縄県公立保育所）
③ 「子どもたちの『今、ここ』を寿ぐ学校を」 大江未知（兵庫県公立小学校教諭）
【世話人】 梶村光郎（沖縄大学） 馬場久志（民研・埼玉大学）
【参加人数】 14名

第1分科会は、標記のテーマを掲げつつ、オンライン開催に伴う時間短縮で2報告に限られたことから、特に幼児・児童に関わる実践報告を受けて、子どもの育ちと権利の問題に迫ることとした。沖縄県内から1報告、全国から1報告を得ることができた。

問題提起

始めに、馬場久志氏（埼玉大学・民研運営委員）から問題提起があった。資料項目は次の通り。

1. コロナ禍で見えてきたこと
 - 厳しい状況 ○子どもの権利の問題
 - 学校のこと ○生きることへの気づき
 - 新自由主義の破綻
2. 頑張る子どもたち
 - 我慢と不安と、剥奪された自由 ○大人の目線での生活 ○子どものつらさ ○けなげに、したたかに
3. 頑張る大人たち
 - 大人の生きる環境はよくない ○追い打ちをかける経済苦境 ○教育・保育・福祉・医療・行政そして各現場で踏みとどまる人々の努力
4. 安心と希望が保障される社会へ
 - 子どもも大人も守られなければ ○助けをもとめてよい ○コロナのもとでこそつながりをその上で、分科会への期待として4点が述べら

れた。

- ①沖縄での実践と全国の実践との交流によって、現実を知り、情勢をとらえる軸を見いだすこと。
- ②今、現に主権者である子どもの権利保障の問題を共有すること。
- ③子どもとの関わりの中に、将来への希望を見いだすこと。
- ④全国集会ならではの成果として、沖縄と全国各地にわたる遠隔の仲間を得ること。

報告1と討論

第1報告は、沖縄県公立保育所保育者の2名から「コロナ禍で考える保育の『新』と『真』」と題して行われた。報告資料の項目は次の通り。

1. コロナ禍で変わった保育
 - 保育内容の変化 ○行事の縮小、中止
 - 保育の見直し、改善した事
2. コロナ禍で見た保育の現状・課題、気づき
 - 子ども、保護者、保育士それぞれの立場から
3. その他

報告の概要は次の通りである。すなわち、子どもの願いに応える質の高い保育とは何だろうといつも考えている。保育士不足や保育者の価値観により、子ども主体ということが、言うことを聞かない子どものわがままに見えてしまう恐れがある。質の高い保育には、保育環境の改善（及び保育士の処遇改

善)と、保育者の専門性の向上だと思いついた。

だが保育の質の向上に向けては、多忙を理由に保育者同士で十分に語り合えない現状、「例年通り」が定着し新しい取り組みに向けての議論が進まない、共通理解が深められないなど、課題がある。以前から園だよりに記載していた子どもの権利条約について、保護者に(保育者自身も)意識し、理解を深めてもらうために、改めて説明したいと提案したが、管理者から重すぎると却下されてしまった。今出来る事として、保護者への情報発信(子どもの姿、育ち)、ドキュメンテーション作成に力を入れている。

そしてこれからの保育として、これまでの「当たり前」を見つめ直し、『子どもの最善の利益』を優先に、『保育の質の向上』を目指して保育の『真』は残しつつ、保育の『新』を取り入れることが課題であると報告された。

報告の中では、保育の日常場面が数多くの写真や動画を交えて報告された。その後の討論では、子どもが困る場面で保育者がすぐに介入せず見守りながら、他の子どもたちが関わって解決していく状況をじっくりつくる様子が、参加者の共感を得た。「時間をかけること」という言葉が心にしみたとの発言もあった。4コマ漫画で保育を伝える取り組みも注目された。

報告2と討論

第2報告は、兵庫県公立小学校教員の大江未知氏から、「子どもたちの『今、ここ』を寿ぐ学校を」と題して行われた。報告資料の項目は次の通り。

1. 長すぎる1学期の悲鳴
2. 3か月休校の残酷と学校再開の喜び
3. 子どもたちの「今、ここ」を大切にせる教育課程を
1学期 子どもたちと学ぶ 「ぼくが ここに」
(まど・みちお) 伸びちゃった時間で(おまけ)
4. 2学期 子どもたちの声
休校中の厳しい実態に続き、再開後の学校で、詩や物語を教材にした授業での子どもた

ちの姿が詳しく報告された。

子どもたちは互いを気遣いながら過ごしている、子どもたちを丁寧に見るには、子どもの声が聞こえるものにしたいと設けた「おまけの時間」からは、大人不信も垣間見えたという。どんな子にとっても居場所である教室という課題も語られた。

報告の最後には、コロナの中で教師として学んだこととして、①子ども理解を基盤にして、教育課程を構想すること、②子どもと同じ地平に立って、世界を眺めること、③教材、文化材、学びをくぐりながら、未来を展望することが提起された。

討論では、「存在が祝福される学校での学びとは」、『寿ぐ』というテーマの文言への共感、「コロナ禍で不安や不満を持つ子どもたちの声を聴き共感して心を支えていくこととともに、子どもたちがコロナ禍の不安や不満を忘れてしまうほどに魅力的な授業を創っていくことの大切さを感じさせられました」などの発言から、次第に報告1と重ね合う議論が展開された。「子どもは的確、明確!」、「園児と先生、生徒と先生が『対等』な存在であること、そのことが、管理者と先生の間にも成り立たないといけない」「響き合う関係」などの発言が続いた。

終わりに

時程の制約から全体討論の時間は設けなかったが、両報告に通じる子ども理解のことや、職場での取り組みなどについては、両報告を行き交う議論ができたことが特徴的であった。保育と小学校教育をつなぐ、子どもの見方や捉え方のスジが示されたという指摘もあった。報告から励まされ、また報告者を励ます討論であったといえる。

事後に報告者から次のコメントが寄せられた。「多くの方が共感、応援、関心を持ってくれて安心しました。子どもたちのために行動すること、権利のために行動すること。そして、思考を止めないで今までできてよかった。」

厳しい状況の中で揺るがず希望と識見を持ち続けることは簡単ではない。分科会での実践交流が報告者ばかりでなく各参加者の努力に報いるもの

であれば幸いである。そして次の感想が今後への導線になればと、願うものである。

「大人も共感して寄り添ってもらえると嬉しいなど実感。だから、やっぱり子どもにも寄り添い続けたいなど改めて思いました。」「共感する人たちが増え、

自分の生活や社会を良くしていこうという人達と繋がれることを期待します。その人とつながることで、私たちの知識や心が豊かになり、子どもたちへ還元していけたらいいなあ。」

(文責 馬場久志)

第2分科会 学力向上策と道徳教育の教育課程

【レポート】

- ① 問題提起 金馬国晴(横浜国立大学)
- ② 「道徳の教科化と学校スタンダードによって、子どもたちがどんな様相を見せているのか」 船越裕和(沖縄県公立小学校・全生研)
- ③ 「学力テスト全国6位、その光と影」 和泉康彦(沖縄・数教協)

【世話人】 和泉康彦(沖縄・数教協)、船越裕和(沖縄県公立小学校・全生研)、
金馬国晴(民研・横浜国立大学)、中村清二(民研・大東文化大学)

【参加人数】 30名

和泉氏と船越氏から学力と道徳についての報告後、総合討論を行った。以下、2氏の報告を中心にまとめる。

全国学力テスト 最下位から 6位(2019)、その光と影、未来

和泉氏から、沖縄の学力テストに関わる問題が報告された。小6での得点が、3年後の中2の得点では大きく下がっていたこと、したがって「学力」の「剥落」がみられること。また、テスト未受験者が多数おり、理由がつまびらかではないこと。そして、行政からの介入の異常性である。

その異常性は、各自自治体の教育委員会を飛び越えて、県教委が介入したこと、学テの成果が教員評価の指標に結びついた WEB システムで、それを給与へ反映できるようにしたことに表れている。

こうした職場環境の中で何が起きているかという

と、情緒・自閉学級が、この10年間で20倍に増加したこと。不登校も全国的に最高水準になった(小学校、高校で全国1位)。また、教職員の病気休職者数も全国1位である。

こうした状況の沖縄の教育に、和泉氏が提案するのは、多様で豊かな楽しい学校だ。中でも、数教協で学んできた経歴から、「楽しい授業」に可能性を見る。

和泉報告への質問

質問:特別支援学級在籍の未受験者は統計的に影響を与えたか。

—通常は5クラス。10クラスを越す学校もある。校長は自慢する。親に対して、受け入れるので安心して下さい、と。気になるのは、そうした学校の学力テストの点数が高い傾向。

質問:テストを受けさせないのはどこの判断か。

—特別支援クラスの子も調査対象。県レベルでは

ないが、市町村レベルで相談の上で外していいと市教委が。ただ、その文書は回収された。情緒学級に追いやられている子もつらい。教委の支援訪問の前からピリピリ。また、受けなくていいよというのが教師の人情。仕組みの問題もある。教員も3割が非正規雇用。点数をあげないと来年採用がない可能性も感じる。

質問：発達を無視して特別支援学級が増加しているのか。特別支援の教室の誕生月を見ると年度後半の子どもが多いとも聞く。発達の幅があるはず。一学力でじゃなく、県教委による「揃える」が始まってから、揃えられない子が、発達的に特別な支援が必要と判断される。例えば、何度言っても靴下を脱いでしまう、履けない子など。2013年度から。

質問：楽しい授業とは、どのような授業か。

一例えば角度の単元。星空にある星が、一年をかけて一回りする、また一年が365日あることから、およそそれが分度器の360度と重なる。というように、身近な生活の中の現象を手がかりに、算数の基本的学習事項をイメージしやすく。時計も。「シュメール人」「メソポタミア人」の発見と教えると、数年経っても子どもたちの中に残っている。教科の内容に即して、楽しい授業を。

質問：教科を超えた、というか教科をまたいだ内容でしょうか。

一あくまで算数の授業

道徳の教科化と学校スタンダードによって子どもたちはどんな様相を見せているのか

船越氏からは「道徳」に関わって教室の中の具体的な取り組みが紹介された。その背景には、学校スタンダードが、子どもの内面に抱えるさまざまな事柄を考慮する余地もなく、価値ばかりを押し付けるものとなっていることがある。

子どもたちはこの状況に対して学校への抗議の眼差しを持っているという。例えば、「先生たちは私たちをゆたぼん化しようとしている」という声に表れている。にもかかわらず、教師たちには「あたりまえのこと」という発想が固定され、子どもたちは、諦

め、聞いているふりをし、現状へ埋没していくという。

以上のような状況に置かれた子どもたちが、自分たちの声をどう取り戻すのか、船越氏からは道徳の授業を用いた方法が提案された。

小学校2年生の「きんのおのときんのおの」という教材文がある。この授業で子どもたちから次のような意見が出た。

「神様っていじわるじゃないかなって思う」「だって、嘘をついた木こりはよくないと思うけど、仕事するための斧を返さないこの木こりは困る」。この意見に「嘘ついたからしょうがないさ」と反論の声。その声に当初の意見を述べた子どもは、お金を稼げなくなる、という。それを受けて、「神様は『嘘ついたらダメだよ』って言葉で教えればいいのに」という発言などが出た。

ここで船越氏は全員に問う。「嘘ついたことある子！」。全員が挙手。担任の私も挙手。「お母さんに『宿題した？』って聞かれて『終わったよ』って嘘ついちゃった」「ニンジンが嫌いだからこっそりゴミ箱に捨てて食べたことにした」「冷蔵庫のアイス食べたけど食べてないって嘘ついた」などいろいろと経験談が出た。

船越提案は、道徳的価値について批判的に考えるきっかけが日常に溢れており、それを教材にするというもの。

船越報告への質問

質問：教科道徳を、他の先生はどうされているか。自主教材を使っているか。

一サラッと流す。副読本のときから。学校は「やんわり」している。ある程度自由に。でも自由でないのは、スタンダード。つながっていくしかない。自主教材としては、教室の中で起きたトラブルや「黙想って何」など日々の子どもたちの状態から。価値論争を。

意見：船越さんが闘っているので。防波堤になっているから「やんわり」しているのでは。船越さんのような先生がいないと。

以上、2つの報告を受け、総括討論へと移った。提出された論点のみ、記しておく。「教科道徳は成立させてはならないというが、道徳性の教育がおもしろく成立する場面は作らなければならないのでは

ないか」「本当に魅力的な授業をすれば、スタンダードに対抗することができるか」「ディスポジションの形成を教科・教科外でどう構想するか」「特別支援学級増加はなぜか、本当の支援とは何か」

(文責 中村清二)

第3分科会

子育てと学校づくり・教職員の働き方

【レポート】

① 趣旨説明

松田洋介(大東文化大学)

② 現代の教員文化の変容と働き方改革

長谷川裕(琉球大学)

③ 小・中・高校現場の働き方改革の現状と課題

澤岬優子(沖縄県教職員組合那覇支部)、照屋 淳(沖縄県立首里高校)

④ 綱(つな)からつながる地域の輪

儀間奏子(沖縄県南城市立大里北小学校)

【世話人】 儀間奏子(沖縄県南城市立大里北小学校) 三村和則(沖縄国際大学)、

松田洋介(民研・大東文化大学)、勝野正章(民研・東京大学)

【参加人数】 22名

1 趣旨説明

最初に本分科会世話人である大東文化大学の松田洋介から、上からの教育改革に翻弄される現在、「わたしたちの学校」の新しい姿をつくるための道筋を、本分科会の3つの報告とともに考えていきたいという趣旨説明がなされた。

2 現代の教員文化の変容と

働き方改革 (長谷川裕／琉球大学)

長谷川報告は、全国の教員に対する質問紙調査で得られたデータをもとに、「献身的教師像」という日本の教師たちが長らく共有してきた教職観をめぐる実態と機能を問い直すものである。

献身的教師像とは、子どものために自己犠牲的・献身的にその職務を果たす「子ども想いで熱心な」教員という理念像である。それは、必ずしも教員の実態そのものが映し出された像ではないが、

そうした理念像が生徒・保護者・住民などに共有されることによって、教員はその信頼・権威を確保することができてきた。またそれは、教員たち自身にも共有され、かれらにとって、“自分たちは子どものために自己犠牲も厭わず献身的に職務を果たす存在である、またそうあるべきである”という自己イメージとして、その教職アイデンティティを確保するための装置という役割を果たしてきた。と同時に、献身的教師像は、かなり前からその機能不全が指摘されてきた。つまり、教員が献身的教師像という自己イメージをもっている、それを支えに教職アイデンティティを確保することができなくなっているという指摘である。その一方で、献身的教師像は、日本の教員世界にまだまだ根強く残存し、「働き方改革」推進のいわば下からの障壁になっているのではないかと指摘もされている。

こうしたことを念頭におきつつ、献身的教師像は今実際のところどうなっているのかを、教員を対象

とした調査のデータを用いて検討したところ、次のような結果が得られたという。すなわち、教師たちを、「献身性」(教職への献身性の強さ)と「やりがい・よろこび」(教職へのやりがいや喜びの強さ)の二軸を用いて4つに分類しつつ、それぞれの教師の意識を検討したところ、「献身性」と「やりがい・よろこび」のいずれも強い教員(=献身的教師型)は、子どもの主体性を尊重しようとする“まっとう”な指導観も保持している一方で、多忙感・疲弊感が小さくなく、教職アイデンティティの攪乱状態にあるケースも少なくない。他方で、「献身性」が低いにもかかわらず「やりがい・よろこび」が強い教員(=非献身的充実型)は、教職は子どもの成長と関わるやりがいがある仕事であり、自己犠牲的な献身性によってではなく充実感を抱きながらできる仕事である”というような教職観を形成し、とりわけ若い世代の教職アイデンティティの強力な支えとなっているという。

以上から、献身的教師像は、意識的に保持を図るべき教職観ではないということ、それらは、働き方改革の阻害要因となる可能性もあるということ、それに対して、非献身的充実型の教職観こそが、現状で教職アイデンティティを強力に支える教職観としての機能を果たしており、それを支える教員同士の関係性が形成されることが望ましいという結論が導き出される。

明快な結論を導き出した長谷川報告に対しては、「非献身的充実型」の理解をめぐって様々な意見・質問が出たが、旧来的な「献身的教師像」へのこだわりは参加者間でも多様だったものの、「献身的教師像」だけではこれからの学校現場を変えていくことができないという点は皆が共有しており、組織的な動きに対する両義性をもつ「非献身的充実型」の教師たちが学校づくり、そして民主教育の担い手となる条件とは何かという方向で議論が展開していった。

3 小・中・高校現場の働き方改革の現状と課題

(澤岬優子/沖縄県教職員組合那覇支部、 照屋 淳/沖縄県立首里高校)

澤岬報告では、コロナ禍下における沖縄県の小中学校現場の実態について、教職員組合による調査で得られたデータをもとにした報告がなされた。1学級あたりの子ども数が多く「密」を避けるのが難しいこと、検温や消毒、保護者対応など新たな仕事が増えているにもかかわらず、教職員の増員などの対応策がなく、現場がさらに多忙化していること、休校措置によって子どもの家庭的背景の違いが顕著に現れていることなど、コロナ禍によって以前から存在していた学校と社会の脆弱性がより明白になっており、そのしわ寄せがとりわけ立場の弱い子どもに來ていることが指摘された。照屋報告では、県立高校の学校現場の実態が明らかにされた。それによれば、2018年度までは勤務管理は出勤簿に押印という形式だったが、勤務実態がきちんと把握されていない問題が露呈し、2019年度以降、出退勤や出張・年休等の処理は全てシステム化し、個々の職員が出退勤時・休暇取得などがデータとして保存されることとなった。1カ月あたりの勤務時間が80時間を超えた場合、管理者から「産業医との面談を希望するかどうか」が打診されるようになった。ただし、勤務管理が明確にできるようになったからといって、仕事量が減っているわけではなく、資源の投入無き働き方改革の限界も指摘された。

沖縄の勤務実態を具体的に明らかにした両報告が呼び水となって、各地の参加者が自分たちの勤務実態を語り、現在の「働き方改革」の困難性が共有されることとなった。また、それを打開する主体形成のあり方が、長谷川報告の教職モデルと関わらせながら議論された。

4 綱(つな)からつながる地域の輪 (儀間奏子/南城市立大里北小学校)

儀間報告は、儀間さん自身が取り組んだ40年余りの伝統を誇る「与那原大綱曳」に取り組んだ、小学4年生の実践についてであった。数年前に消

滅した運動会の綱曳を復活するため、4名の担任が知恵を出し合いながら、子ども達と地域の人々を繋ぎ、その中で子ども達が成長していく様子が、たくさんの写真とともに話された。

圧巻であったのは、多忙化が進んでいる学校現場でありながら、学年全体が一体となって教科横断的な学習を地域社会を巻き込みながら／地域社会に巻き込まれながら、展開していくことである。興味深いのは、この充実した取り組みに参加した教師たちが、もともと「地域学習」に傾倒していた教師ではないところである。あるいは、私生活を重視した教員生活を送っていた教師もまた徐々にこの取り組みに熱中していくのである。

参加者からは、悲壮感無く、楽しんで実践を展開する儀間実践の教師たちこそが、まさに「非献身充実型」教師なのではないかという意見が出された。教師も子どもも「義務感」を払拭して熱中できる、儀間実践のような取り組みはどうすればつくることができるのか、その主体的・構造的条件についての議論が活発になされた。

分科会全体を通して、学校現場の過酷な実態を把握しながらも、そこに絶望せず、「わたしたちの学校」をつくっていくための道筋がほのかに見える希望のもてる分科会であった。

(文責 松田洋介)

第4分科会 性とジェンダー平等の教育

【レポート】

- ① 問題提起 杉田真衣(東京都立大学)
- ② 「学校・地域から見える子ども、若者の性」 笹良秀美(助産師/思春期保健相談師)
- ③ 「沖縄で生きて 学んで つくりだす～性と生・障害・平和の学び～」
安里瑞穂(特別支援学校中学部)

【世話人】 船越裕輝(沖縄性教協)、村末勇介(琉球大学)、
杉田真衣(民研・東京都立大学)

【参加人数】 25名

I 問題提起 杉田真衣(東京都立大学)

コロナ感染症の影響はとりわけ女性が強く受け、日本でもDV被害者、10代の妊娠相談件数の増大、若年女性の自殺数の急増に表れ深刻な問題が顕在化している。閣僚女性比率ドイツ40%、ニュージーランド30%、フィンランド60.1%に比して10%の菅内閣は「コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会」を内閣府男女共同参画局に設置したが、対策の遅れは否めない。2020年までに指導的地位に女性が占める割合を少なくとも30%にすると2003年に政府は決めたが達成できず、7月

に「20年代の可能な限り早期に」達成すると表明。2015年国連サミットで採択の「SDGsを中核とする持続可能な開発のための2030アジェンダ」に「ジェンダー平等」が掲げられたことを意識しているが問題の先送りだと批判された。日本は「女性差別撤廃条約」の「選択議定書」を未だ批准していない。2020年10月に「女性はいくらでも嘘をつける」と発言した杉田議員は、「慰安婦」問題を扱う科研費の研究を攻撃、軍事研究を進めたい政権による日本学術会議への不当な介入とも地続きだ。厳しい状況におかれている沖縄での取り組みから学び、私たちが何をしてこなかったか、今何をなすべ

きか考えたい。

2 報告1 学校地域から見える 子ども、若者の性

笹良秀美(沖縄・助産師/思春期保健相談士)

(1) 沖縄の子どもたちの現状

沖縄母子保健重要課題の一つが10代の妊娠。1960年代から全国の2倍で推移。県立高校で2017、18年に妊娠・出産を把握した生徒159名、そのうち22名が自主退学。妊娠出産が女子生徒の学業に大きな影響を与えている(2020年5月沖縄タイムズ社説)。10代の性行動は全国に比べて早い傾向。沖縄の「夜型社会」、コミュニティの密さ(エイサーなど)の影響もあるか?

(2) 性教育の実際

沖縄の性教育実施率はほぼ100%。外部講師の助産婦、養護教諭・体育教師などが世界エイズデーなどと関わらせて小学校では高学年中心に、中学校は思春期保健事業の取り組みで、高校はエイズ、人権教育の一環として年1回ほど行う。性教育実施後の生徒の感想からみえてくるのは、性情報は学校の性教育から得ているが、高い所持率のスマホからの誤った情報にふれ発達段階に応じた正しい性の知識がない、周囲に信頼して相談できる大人がない、男尊女卑、長男至上主義など性役割にとらわれたコミュニティから「らしさ」を望まれる辛さがある、出産、妊娠への周囲の意識の低さから安易に「産む」方向に、性の多様性の悩みも多いなど。

(3) 性教育及び健康教育の課題

沖縄社会における「命は宝」が根底にあり、妊娠・出産への意識が低く「産む」ことがゴール。本人の意思とは別に産めば何とかなるという周囲の声に安易に出産を選択するケースが多い。「産む」と「育てる」を一体化した性教育が必要。愛着形成に乏しく自己肯定感が低い子どもたちが多く、性の非行につながる。「10代の出産」は養育者・学校関係者の課題でもあり、学校管理者も性教育を歓迎している。性の自立の獲得のため今後ニーズにあっ

た内容の性教育をしなくてはならない。

3 報告2 沖縄で生きて学んでつくり だす～性と生・障害・平和の学び

安里瑞穂(沖縄・特別支援学校中学部)

(1) 沖縄で生きるということ

大学から移住した沖縄で就職し障害児教育・性教育に興味を持つ。沖縄フラワーデモ、辺野古新基地建設反対運動にカヌーで参加。今沖縄で対中国防衛のためと自衛隊基地が増えている。宮古島で自衛隊配備を本島の人知らない。沖縄では平和教育で沖縄戦の歴史は継承されているが、自衛隊誘致派は自国の兵隊が中国から守ってくれると信じている。沖縄戦の教訓「軍隊は住民を守らない」が薄れていると危惧。度重なる軍用機の墜落、米軍事件や事故にも慣れがきていないか。島の閉鎖性、経済・情報・文化・交通手段の貧困、逃れられない人間関係がある。

(2) 学びをつくる そのために学ぶ

知的障害教育を20年。最近2次性徴中心に性教育を始め子どもたちと性と生を学んでいる。最多2時間授業を4、5回程度。現在肢体不自由教育3年目。寝たきりの生徒たちにおむつ交換する際に「あなたの大事なところさわらせてね」と声をかける。重度の子どもたちでも性の関心があり、おむつの中に手を入れることへの保護者の悩みが寄せられる。職員の中にも「汚い」と手をはねのけたりする場面がある。2年目から性教育に踏み出し保護者の悩みに応え小学部4、5、6年生に思春期の話をした。保護者の思いをうけとめて教職員の意識を変えていく必要があり、性教育実施にあたり教職員研修会も必ず開催した。

(3) 根っことは同じ

性・障害・平和をつなげるのは難しいがどれを取り上げても願いは一緒。私が私らしく生きるために目の前の人とその人らしく豊かに生きること。そのために学び自分の中に落とし込んでアウトプットしていきたい。

4 質疑・討論から

沖縄の性教育実態をみると、学校管理者は現状を反映し性教育に対してコロナ禍でも削れないと認識が変化しており、実施に反対されることはない。小学1年もいくつかあるが多くは4年から。保健の授業との連携は難しく、総合学習、特別授業の形が多い。100%実施の中身はエイズのポスターを貼るだけでも実施。中学から避妊も教えるが中絶は減らない。10代出産は不登校生に多く、経済的困難も関係している。性教育への現場のとらえは薄く学力向上に向かわれている。沖縄の「産んでいいよ」への対策として、社会的対策とからめた性教育の中で妊娠中絶を教えるのも一つの選択か。行政では10代妊産婦の居場所施設づくり、24時間SOS支援に踏み出している。10代の妊娠で夢をあきらめた子がたくさんおり、多くの子は産む・産まないは自由という考え。

日常生活の中で子どもたちとの関係性をつくる大人の課題が大きい。

(文責 棚橋昌代)



第5分科会 平和教育の創造

【レポート】

- ① 問題提起 山口剛史(琉球大学)
- ② 国を越えて歴史認識を共有できるのか？
——対馬丸事件から考える 北上田源(/琉球大学非常勤)
- ③ 大学生による修学旅行生への平和学習の取り組み——スマイライフの活動実践
沖縄国際大学スマイライフ

【世話人】 山口剛史(琉球大学) 中嶋哲彦(民研・愛知工業大学)

【参加人数】 23人

はじめに

分科会のねらいは、平和と戦争をめぐる歴史と認識を子ども・若者に押し付けるのではなく、彼らが自分の言葉でそれらを共有することを目指す平和教育を探求することにある。問題提起を含め3本の報告があり、約23名の参加者で質疑討論を行った。

問題提起「沖縄で平和教育を考えてうえで大事にしていること」

山口剛史(/世話人)

まず世話人を代表して山口剛史氏から問題提起が行われた。以下概要を紹介する。

沖縄の子どもたちの平和教育に関する新聞投

書を見ると、「戦争はだめ、平和が大事」といった模範的な回答が見られる。そうではなく、子どもたちの素朴な疑問を言葉にできることを大事にしたい。そういう言葉をどう授業の中で生み出すかが重要ではないか。

「平和教育のマンネリ」ということがずっと言われ続けてきた。「戦争はだめ、平和が大事」、子どもたちはそれが答えだと思い込んでいる。教師もそれが平和教育だと思い込んでいる。また子どもたちは凄惨な映像に嫌悪感を持ち思考停止になってしまふ。教師の押しつけによって、子どもの思考が生まれられない授業になってしまっているのである。

いま、子どもが主人公の授業をどうつくるかが問われている。子どもの疑問や自由な思考が保障される授業、考える平和教育をいかに作り出していくかが重要である。そのうえで沖縄戦学習では、「軍隊とは何か」、軍隊の本質を問うていくことが不可欠ではないか。

報告「国を越えて歴史認識は共有できるのか？—対馬丸事件から考える」

北上田源

北上田氏からは、対馬丸事件を主題にした日本人学生とアメリカ人学生との交流授業についての実践が報告された。以下、概要である。

授業は、まず日本人の学生が調べてきたことを英語で発表し、その後、教員が説明し、最後にグループ・ディスカッションという流れで行われた。

交流授業の後、一人の学生のコメントに「歴史認識の共有は難しい、求められるのは共有より尊重だ」というものがあつた。それが学生たちの議論となり、共有出来るかどうかで議論がその後も続いている。

授業では、対馬丸事件を考える3つの視点を提示した。一つは被害者・犠牲者(沖縄)の視点である。これはこれまでの平和教育にありがちな捉え方である。二つ目にアメリカ軍の視点である。攻撃した潜水艦ボーフィン号博物館の展示資料、乗組員の証言を紹介した。三つ目に日本軍(政府)側の視

点である。対馬丸という船の紹介、「疎開」の本当の目的を紹介した。

この3つの視点を踏まえて、事件の大きな原因は何か両国の学生に考えさせた。最後に、対馬丸祈念館とボーフィン号博物館に何を共通展示すべきか、そして共通展示は可能か、討議させた。授業の結果、自分の国のみを擁護する学生は少なかった。三項対立にしているのでは、犠牲者の立場から考えることができたのではないか。また当事者の証言を共通展示することには、否定的な意見が多かった。

報告 「大学生による修学旅行生への平和学習支援の取り組み——スマイライフの活動実践」

沖縄国際大学スマイライフ

沖縄国際大学のサークル「スマイライフ」の活動について、スマイライフ顧問の藤波潔氏の紹介の後、主にサークル役員の学生による報告が行われた。以下、概要である。

スマイライフは、2004年8月の沖国大へり墜落事件をきっかけに、2006年に結成された学生サークルである。「笑って生きていることこそが平和だ」という意味でスマイライフ(SmiLife)と命名された。サークルの理念は「学び合い」と「社会還元」である。専門的な「平和ガイド」を養成することが目的ではない。学生同士、高校生との学び合い、多様な価値観をもつ人々との関わりの中で学びを深めることを大切にしている。主な活動は、修学旅行生への平和学習支援、サークル内の研修会、他大学との交流、SNS等での発信である。

修学旅行生は学生と年が近いので、話をしっかり聞いてくれ、気軽に質問をしてくれる。これまでの平和教育と違い、ラフな環境で気軽に学ぶことができているのではないか。県内の学生は「沖縄戦ってこんなものでしょ」という固定概念があつて話が入りにくいところがある。それに対して固定概念のない修学旅行生の方が自分の意見を持ち、理解を深めてくれていると感じる。

平和学習がマンネリ化している。小学校のときは体験者の語りを聞くことがメインだったが、75年前の話ではなかなか実感がわからない。だから自分たちは、ガイドや語りよりもディスカッションを重視している。お互いに近い世代がいかに学び合うかが大切ではないか。また今の人権問題と沖縄戦を結び付けることが必要である。自分が幸せになるために誰かを犠牲にしているのではないか、という視点を持つことも大切である。

討議とまとめ

討議では、加害の視点を学ぶことの必要性が論点として提示され、以下のような発言があった。

沖縄の住民虐殺を学ぶ場合、これまで日本兵側の視点がなかった。日本兵の葛藤の姿がみえてきたときに、学生の中に疑問が湧いてくる。それが軍隊教育の問題、本質の問題につながるのではないか。また沖縄の人たちもまた間接的に戦争協力させられていた事実がある。戦争の構造が日常生活、経済の中に組み込まれていた。被害者学習だけでは、なぜ戦争が起きるのかというところまで結びつかないのではないか。

平和学習においてはやはり被害者の視点が重要である。加害者の先には、中国、東南アジアの被害者がいる。いろいろな国に被害者がいることに

共感していくこと、被害者への共感、痛みや感情に寄り添うことが必要ではないか。また加害者も、加害者にさせられた被害者である。加害と被害の両方を持っている、その重層性を丁寧に子どもたちとひも解いて伝えていくことが重要である。

今回は、沖縄の実践、しかも大学教育や学生サークル活動のレポートが中心であった。しかし、沖縄以外の小中高の授業実践にも通じる論点が提示されたと思う。また沖縄の学生たちの取り組みは、修学旅行を通じた平和教育に取り組む教師たちに新たな示唆と実践の可能性をあたえるものではないだろうか。

(文責 木村浩則)



第6分科会 基地・環境問題と教育

【レポート】

- ① 問題提起 安藤聡彦(埼玉大学)
- ② 「辺野古米軍基地建設問題と地域の生活・教育」 喜屋武幸(元中学校教師)
- ③ 「米軍基地と環境—PFOS問題」 屋慶名美和・名嘉正勇(沖縄民間教育研究所)
- ④ コメント 大森享(元北海道教育大学)

【世話人】 安藤聡彦(民研・埼玉大学) 喜屋武幸(元中学校教師)

屋慶名美和(沖縄民間教育研究所) 名嘉正勇(沖縄民間教育研究所)

【参加人数】 20名

第6分科会では、沖縄にとっての日常(当たり前)ーしかし、離れてみれば非日常(異様)ーについて報告がなされた。環境と教育というテーマを掲げるこの分科会では、子どもたちが「学ぶ」という日常が沖縄ではどうなっているのかに焦点が当てられ、学習権を保障する環境とはいかなるものなのか、ひいてはそうした学習環境を取り巻く社会環境などが強い影響力を持っていることが報告された。私もそうした学習権保障に携わる人間として、また、沖縄の人間からの振り返りとして、今回の第6分科会について各報告の要点などにふれつつレポートしようと思う。

まず、報告内容に入る前に分科会名について触れておきたい。安藤氏からもあったが環境問題としての分科会というのは民研でも半世紀ちかく続いてきた歴史を持つ。しかし、その歴史の中では「基地」というテーマが環境問題として十分に議論されてこなかったのではないかという。後述する報告にも出てくるが、学習の環境や子どもたちが成長していく生活環境にとっても重大な問題性を含んでいるにも関わらず、「蓄積が遅れている」という課題意識を提起してもらい、今回の分科会は開始された。

1つ目の報告は名護市・辺野古で教育実践に携わった喜屋武氏の報告である。報告は、現在も普天間基地移設で揺れる辺野古という地域の紹介から始まった。なかでも目を引いたのは他の地域の

基地問題とは異なる点である。それは、宜野湾市の伊佐浜などに見られた「銃剣とブルドーザー」というような暴力的な土地接収とは違って、住民たちの条件闘争という過程で基地や集落が形成されていった経緯だ。他の地域での基地建設が強引な接収とほとんどの無権利状態を目の当たりにした辺野古区の住民は、引き受ける代わりに集落の整備や様々な保障を条件づけることで、したたかな(しかし、苦渋の)選択を行ってきたということである。

しかし、喜屋武報告ではそうした辺野古ですら国策という流れの中で、住民たちが翻弄されている様子が描かれた。特に報告を聞いていた者たちを驚かせたのは住民たちの中に渦巻く「分断」である。上からの補償や補助金などが降ろされる一方で、それらの大部分を東海岸側の辺野古とは反対の西海岸側が持っていつてしまう。あるいは、その辺野古区でも漁業権補償などの分かりやすい部分は補償されるが、騒音などを被る他の住民への補償は不鮮明などといった形で分断がいたるところに生じ、大人たちも意見を表明しあうことを憚る状況が生まれている。

喜屋武氏の実践はそうした中において、子どもたちも意見を表明することが難しい環境に置かれていることを課題として把握し、サイレント・ダイアログを取り入れた学級討論を行ったものである。実際、賛成:反対が4:6で割れるなど社会を反映する

ような結果が出る中で、喜屋武氏が重視することは各々の意見を知ることであった。それぞれの選択の理由なども教師が紹介することで、子ども達は異なる意見に触れ合うことになる。分断をそのままにせず、まずは意見の違いとして目に見えるようにし、「地域の問題を自分たちの問題としてとらえ、自分のことばで自由に表現し合える関係性を創ること」(喜屋武 2020)、まさにそのことを探究する実践であった。

続く屋慶名氏・名嘉氏の報告は、そうした学習環境を取り巻いている生活環境、政治環境の問題を指摘する。

屋慶名氏は「水の安全を求めるママたちの会」などにも参加し、とりわけ子育て世代の視点から私たちの生活に欠かせない水にまつわる問題の報告であった。その問題とは、たびたび沖縄などの基地を抱える地域では報道されていた泡消火剤に含まれる「PFAS」についてである。2007年ごろに沖縄県中部の浄水施設などから高濃度で検出されたことから問題が表面化し、その後の検査などでは全国値の数十倍の数値が検出されている。氏の報告によればこのPFASを含む消火剤を用いている施設に米軍基地があることから、その使用の規制や水質等を含めた調査を求めるものの、拒まれているという。

実はこの背景に存在するのが「日米地位協定」であると名嘉氏の報告が続く。調整役の日米合同委員会などの組織は存在するものの、それらの中で決められた協定は欧州などと比べると非常にアンバランスなものとなっていると氏は指摘していた。国内法などよりも優先されるこうした不平等さがある中で、その地方の自治体は自前でその尻拭いをするようになっていく。先の水をめぐる問題も、県が予算を取って浄水対策を行っているような現状だ。お二人の報告はまさに沖縄という、国家の中に置かれた小さな地域が曝されている環境を詳らかにする報告であった。

では、沖縄における生活環境や政治環境、その中で成長する子どもたちの学習環境を貫くものは

何か。それは、その当事者たちが蔑ろにされているという環境である。喜屋武氏は分科会の最後で「言葉が奪われている」という表現を用いたが、沖縄に渦巻く分断によって表明が憚られたり、表明しても聞き届けられなかったりする状況を表す的確な表現であろう。

こうした環境を目の前に、私たちはどう考え、どう立ち向かっていけば良いのだろうか。最後にコメンテーターの大森氏やフロアから出た意見などにも触れながら、筆者自身の感想も交えてまとめた。

大森氏からは①「学校教育の対応の困難さ」②「それと主権者教育との関係」③「沖縄などで閉じがちなこうした情報を知る重要性」についてコメントがあった。とりわけ、喜屋武氏の報告などに触発されながら、如何にして学校だけでは完結できない環境の問題を主権者として子ども達が学習し、参加するかということが指摘された。同様のことはフロアからも原発と重ねつつ、その当事者が語ることの難しさなどが出されながらも、まずは子ども達の表現する自由な空間が形成されることが大切であることが何度も確認された。

沖縄で生きてきた筆者からすると、この「言葉が奪われている」環境は肌感覚のあるもので、ある意味では日常であった。しかし、こうした学びの場に参加してみると、異様なことであることに気づかされた。このことは大人に限らず、子ども達も同様であろう。自由に自らの言葉を紡ぎながら対話を重ねられる教育空間が成立してこそ、私たちは知らなかったものを知り、他者への想像をすることができる。子ども達が当事者に「成ること」、そのためには教師自身もまた当事者として言葉を紡がねばならない。この分科会で紡がれた言葉を引き受け、新たに繋いでいくこともまた私たち一人ひとりの歩みに懸かっているのである。

この課題を引き受け、他者へと繋いでいくことは教育に携わる筆者自身の課題でもあるといえよう。

(文責 瑞慶覧洗太)

第7分科会 自治体づくりと教育・住民運動

【レポート】

- ① 問題提起 朝岡幸彦(東京農工大学)
- ② 沖縄の地方自治と教育運動 安原陽平(獨協大学)
- ③ 教育権の保障と自治体の役割 石山雄貴(鳥取大学)
- ④ 憲法を子どもの権利へ 赤嶺ふき子(おきなわ子どもを守る会)

【世話人】 朝岡幸彦(民研・東京農工大学) 赤嶺ふき子(おきなわ子どもを守る会)

【参加人数】 12名

問題提起

憲法が保障する地方自治・平和に生きる権利や人権が踏みにじられている事実を端的に象徴する場の一つが沖縄であり、それが端的な形で問われている問題が米軍基地と新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応であるとして東京農工大学朝岡が問題提起を行った。沖縄の事例として、『おきなわ自治の風』から島袋隆志さんと長堂登志子さんの文章を抜粋し紹介した。

島袋さんの文章においては、ここ10年ほどで急激に発展を遂げた沖縄の観光業が、県外資本へ依存し、地域に還元されるものが少なく「ザル経済」と呼ばれていること、さらにそのような経済構造のゆがみは、戦後から米軍基地建設において問題となってきたことを指摘している。新型コロナウイルス感染症による、歪んだ経済構造の顕在化を、コロナ禍以降の沖縄の産業の持続的な発展を考え直す良い機会にしなければいけないと述べられている。

長堂さんは、学校が子供たちの声を十分に聞いていないことの例として、コロナ禍の画一的な行動制限や全国学力テスト体制を挙げている。全国学力テスト体制においては、テストの点数の向上が教師の評価に直結し、それゆえに教師が子供自身に目を向ける機会が少なくなったことを問題とし、民



主的な人間関係づくりを育むような教育の重要性について述べている。

また、朝岡は新型コロナウイルスに対する政府の対応を評価する中で、コロナ禍において全国学校一斉休校の措置は必要なかったと述べ、全国一斉休校の要請によって教育委員会や学校での判断を尊重する対応から、トップダウンによる対応へと転換されたことを指摘した。

コロナ禍においても、子どもの学ぶ権利は保障するべきであり、国・地方自治体の新型コロナ対策に組み込む必要があると主張し本分科会の問題提起を行った。

自治体づくりと教育・住民運動

真に日本国憲法と地方自治の実現が切望されており、「住民の住民による住民のための自治」を

支える自治体・住民運動が求められているであろう沖縄において、憲法の精神と国連・子どもの権利条約を普及・実現するため、沖縄の自治の歴史と地域づくりの現状と未来について、自治体運動・住民運動の視点から安原さん、石山さん、赤嶺さんの3名にご報告をいただいた。

安原さんには、「沖縄の地方自治と教育運動」と題し、ご自身の実践も交えつつ、報告をいただいた。沖縄と地方自治については、地方自治と憲法・住民の関係を憲法95条の住民投票(辺野古の埋め立てを問う住民投票)などの具体例を踏まえご説明をいただいた。沖縄における地方自治については、小林武の『沖縄憲法史考』を引用し、独自性が極めて強いことから、一個特別の自治体を志向するものと考えなければならないと述べた。また、学問と教育運動・地方自治の三角関係を述べ、親和と緊張の上に成り立っていることを述べ、それぞれの領分を守りながらも、相互に影響を与え、各々の領分を豊かにしていくことの重要性について述べられた。最後に学問の領分からの試みとして、ご自身が参加されているちゅらマナープロジェクトについてお話しいただいた。安原先生の実践で得た学びを参加者が地方自治・教育運動にどう活かすかについては本人が考えるべき問題で、まず興味関心を持ってもらうことが重要であるとして報告を終えた。

石山さんには、『教育権保障と自治体の役割』についてご報告をいただいた。学習権のあり方について、ユネスコ学習権宣言を引用しながら、当たり前前に学ぶことが保障されなければならない、そのために教育の無償化は必要不可欠であると述べた。国際的な議論においても、教育は権利という考え方は一般的であり、なおかつ、権利であるから無償にしなければならないと主張している。また、日本における無償化の流れとして、高校無償化や幼児教育無償化についての課題を挙げたうえで、無償化政策における、所得制限等の枠組み・選別の妥当性について疑問を投げかけている。また、貧困者に限定した現金給付がより社会の格差を生み出す、社会的弱者への善意が格差を広げてしまうな

どとして、できるだけ多くの人々を対象とした「ベーシック・サービス」を保障し、その上で生活扶助や住む場所について徹底的に支援する必要性を述べている。最後に、新自由主義的改革を進め、包括していく手段としての無償性・投資としての教育財政支出から、権利としての無償性・「権利保障」としての教育財政支出への必要性を述べ、その権利の保障に必要な需要額を積み立て、その上で公費・私費分担のあり方、教育需要額に対する教育財政支出のあり方、主として私費負担とされてきた授業料とは何かを問い直していく必要があると主張した。

おきなわ子どもを守る会の赤嶺さんには、『憲法と子どもの権利条約を子どもたちへ』というタイトルで報告していただいた。現在、沖縄ひいては日本全体において、いじめ・不登校の児童生徒数が増加しており、それらの原因が抑圧的な教育環境にあることを子どもの権利条約市民・NGOの会が指摘している。コロナ禍においても、画一的な子どもの活動制限、授業数の増加、全国学力テストの実施などにより子どもに対し、より一層厳しい制限が課せられていることを問題とし、コロナ禍を契機に現在の教育現場が抱える問題をもう一度考え直す必要性を主張した。また、憲法や子どもの権利条約などを学ぶ機会を設ける、県の教育委員会に学力テストの実施中止を呼び掛けるなど、おきなわ子どもを守る会が行っている様々な活動について紹介していただいた。最後に、平和の草の根活動として行っている「檻の中のライオン」の紙芝居を事務局局長である島袋さんに朗読していただき、実際の活動の様子を拝見させていただいた。

まとめ

以上の報告(①憲法、②教育無償化、③子どもの権利を守る運動)と議論を通して、沖縄における地方自治・教育運動・学問のそれぞれの領域を尊重しながらも強く連携して課題解決する可能性が確認された。地方自治体と教育運動との関係をテーマとする、こうした分科会の視点は政策批判を越

えて自治体独自の教育施策の可能性を模索するう
えて、極めて重要なものであると考えられるため、

今後も継続的な議論をすることが求められる。

(文責 藤田捷太郎・朝岡幸彦)

沖繩から教育を問う

民研オンライン全国交流会

民主教育研究所(民研)で、百数十人が参加。梅原利夫代表運営委員)の第20回全国教育研究交流集会在28日、「子育てと教育に『命(ぬち)どう宝』を根づかせる」をテーマに、オンラインで沖縄と全国を結んで始まりました。

沖縄県民間教育研究所、沖縄県民間教育研究団体連絡会との共催

「沖繩から日本の教育をとらえ直そう」と語り合いました。

集会では琉球大学の上間陽子さんが、沖縄の若い女性たちの置かれている状況について報告しました。

埼玉大学の安藤聡彦さんは、原発や軍事関連施設が集中する青森県の下北半島や、沖縄

県の西表島を訪ねて、現地の子どもや教師、地域の人たちと交流したことについて話しました。

沖縄県の小学校教師は、「学校のまなざし」ではなく、「生活のまなざし」を子どもに向けることが学校にも日本の社会にも必要だと語りました。

大東文化大学の中村

2020年11月29日 しんぶん赤旗

コロナ禍子の成長見守る

民研全国交流集会閉会

沖縄と全国をオンラインで結んで開かれていた民研全国教育研究所（民研）の第29回全国教育研究交流集会（沖縄県三宅）は29日、七つの分科会での討論を行い、閉会しました。子ども・青年の育ちと「主権者教育」の分科会では、保直所や小学校での実践が報告され、参加者はコロナ禍の中の子どもの姿をどのように議論を深めました。

兵庫県の小学校教師・

分科会で実践報告・討論

大正末期から戦後、戦後の失業者などコロナ禍が子どもに与えている影響にも触れつつ、誰の授業を通じても子どもたちが自分の思いを出し合い、考え合ったり成長していったことを紹介。コロナ禍の中で、子どもへの理解を基礎にしながら教育課程を考え、ことなどを学んだと話し合いました。

子どもの主体性を大事にして「待つ」ことの大切さなどが話し合われました。政府が進めようとしているローゼン（キガ）スタイル構想の問題も議論されました。

しんぶん赤旗

第29回全国教育研究交流集会 沖縄ー全国 オンライン 報告記録集

子育てと教育に「命どう宝」を根づかせる
一人権と平和の教育をとらえ直そうー

2021年2月

編集 民主教育研究所

〒102-0084 東京都千代田区二番町 12-1

全国教育文化会館 5F

Tel 03-3261-1931

Fax 03-3261-1933

Email office@min-ken.org

HP <https://www.min-ken.org>

